公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信　2016年2月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆探鳥会訪問記
（特集・会員を増やすための探鳥会③）・・1
◆京都支部からの情報
「探鳥会で会員拡大と人員確保」・・・・・15
◆探鳥会保険集計結果・・・・・・・・・・17
（2015年12月分）
◆普及室からのお知らせ・・・・・・・・・19
・『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版の取り組み
◆今月の購読者数・・・・・・・・・・・・・21
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・・22
◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・22

◆探鳥会訪問記（特集・会員を増やすための探鳥会③）

12月号から引き続き、関東ブロック及び近畿ブロック所属の支部と一緒に開催している「会員を増やすための探鳥会」の様子をご報告します。今月号では次の６か所をご紹介します。

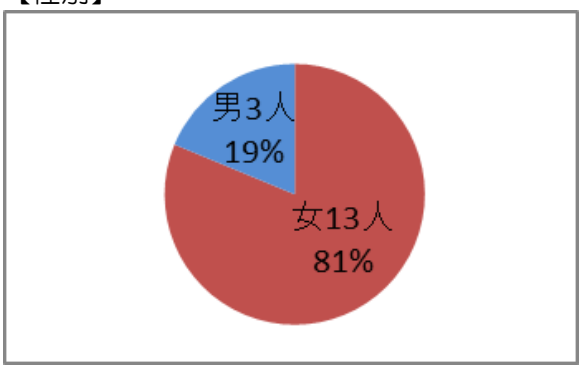
表１.

	開催日	支部名	開催場所
No11	12/13(日)	埼玉	大宮公園
No12		茨城県	霞ケ浦総合公園
No14	12/23(祝水)	京都支部	鴨川デルタ
No15	12/27(日)	栃木	井頭公園
No16	1/17(日)	和歌山県支部	和歌山城公園
No17	1/23(土)	栃木	那須野が原公園

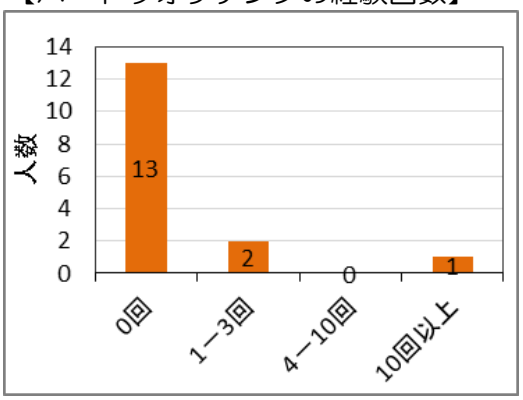
『はじめてみませんか？バードウォッチング in 大宮公園』（埼玉）

【日時】2015年12月13日（日）10時～12時頃
【天候】小雨
【場所】大宮公園
【参加人数】16名
【リーダー】10名
【お試し入会】９名（非会員のうち６割）
【広報】
＜インターネット＞ 財団HP、財団Facebook、環境らしんばん
＜メール＞ 一斉メール送信（10/20、21に全国の29,269名に送信）
＜チラシ＞ 探鳥会のご案内（9/20から全国35,000名に送付）
＜雑誌＞ ランドネ（11/21）

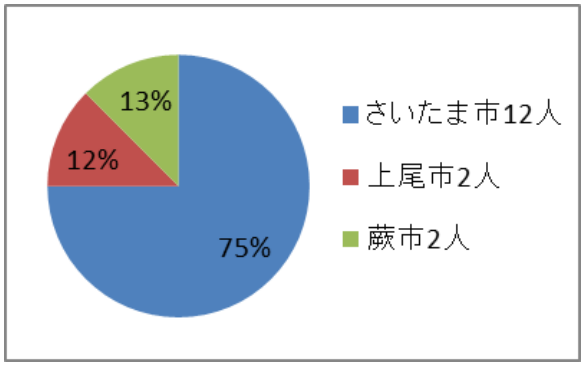
【性別】



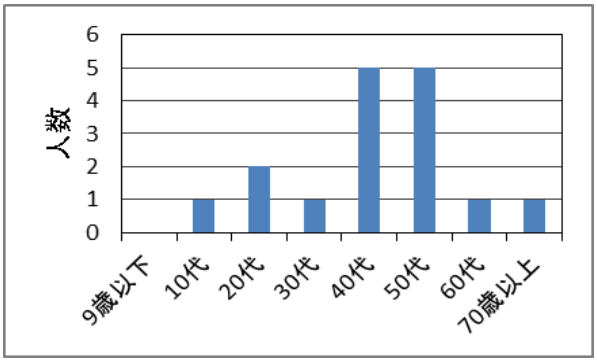
【バードウォッチングの経験回数】



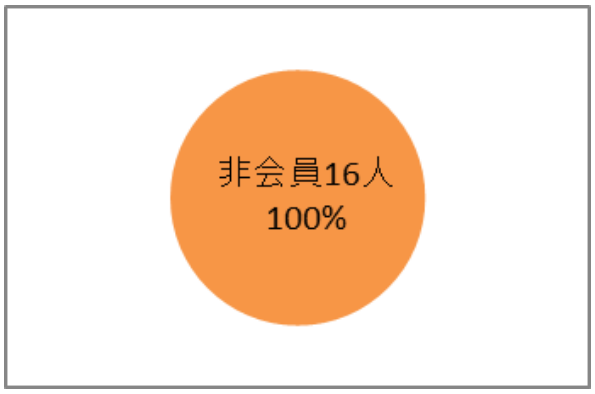
【お住まい】



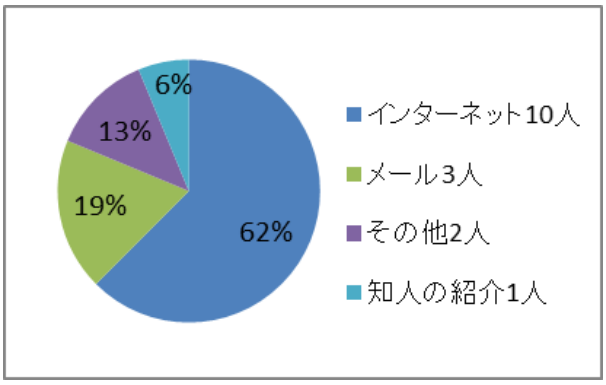
【年齢構成】



【会員／非会員】



【何で知ったか】



■探鳥会概要

大宮公園は、埼玉県で一番利用者の多い県営公園です。今年で開園 130 周年を迎える歴史のある公園で、自然に恵まれた広大な敷地内には、体育施設や博物館、動物園もあり、人々に親しまれています。

参加者は幅広い世代の 16 名。ご夫婦や親子での参加が多いようでした。探鳥会では、集合場所の大宮公園駅から 10 分ほど歩いて大宮公園へ向かい、園内にある「舟遊池」の周りを一周し、水辺と山野の鳥を観察しました。

■探鳥会の様子

小雨が降りだすあいにくのお天気の中での開催となりました。集合場所の駅では、参加者に分かりやすいように、支部の旗をかかげ、メジロの着ぐるみを着てリーダーが待っていました。参加者が来ると、
「ようこそ来てくださいました。」
と暖かくお出迎えされています。

大宮公園に移動してから、挨拶や双眼鏡の貸し出しがありました。参加者を３グループに分け、１グループに参加者５、６名、リーダー3、４名という体制で探鳥会が始まりました。

まずは、近くのポールを対象物に見立て、双眼鏡の使い方を説明していました。ここで望遠

鏡の見え方やピントの合わせ方も確認していました。
　池には、オナガガモやキンクロハジロ、バンなどがおり、リーダーの丁寧な説明のもと、ゆっくりと観察が出来ました。しばらく歩くと
「グワワワワ」
と不思議な声が聞こえてきました。木にとまったカワウにハシブトガラスがちょっかいを出しているところでした。「好奇心が強い」というカラスの行動を皆で面白く観察しました。
　参加者は、探鳥会が進むにつれ、双眼鏡の使い方に慣れてきたようでした。
「オオバンの水への潜り方ってダイナミックですね。水草をくわえてあがってくるけれど食べないで、撒き散らしているだけみたい。不思議です。」
「今キンクロハジロが落ちてきた葉に驚いて逃げましたよ。面白い。」
など、自分で観察しながら、リーダーとの会話を楽しんでいました。
　林では、ビンズイとカシラダカを観察し、その後、解散場所に向かっている途中でカワセミと遭遇。参加者はリーダーの望遠鏡を覗くものの、
「実際はどこにいるのですか。」
と、自分の双眼鏡で積極的に観察していました。
　最後に簡単な鳥合わせとお試し入会の案内があり、９名の方が入会されました。

▲カワセミを観察中

■参加者の声

20 代の女性：半年前にカラスの動画を見て、カラスの頭の良さに気付き、好きになりました。それ以来、鳥が気になるようになり、３日前にインターネットで検索して、イベントを知りました。

小学生の女の子のお母さん：アウトドアが好きで山登りをしています。山の雑誌を見ていたら載っていたので参加しました。

■まとめ

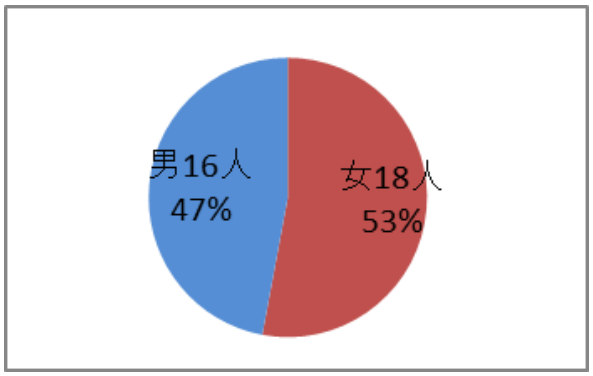
　遅れてきた参加者の対応や終了後の駅への誘導など、細部までリーダーが互いに指示を出し合っており、リーダーの連帯意識や結束力の高さがあらゆる場面で光っていました。
　ほぼマンツーマンの丁寧な対応に、手持ち無沙汰にしている参加者が１人もおらず、非常に参加者満足度の高い探鳥会だったと思いました。
　また双眼鏡の貸出をしたことで、参加者が双眼鏡を使った観察に慣れていく様子が見られ、よりバードウォッチングの楽しさを味わっていたように感じました。

（普及室／堀本理華）

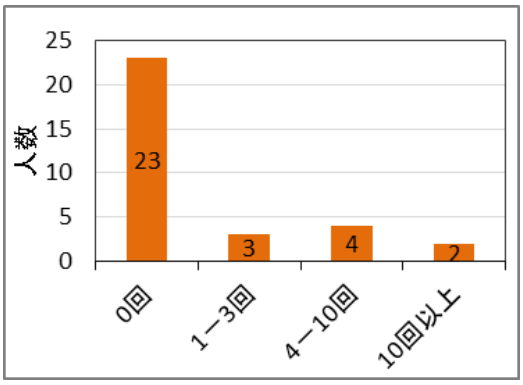
『霞ヶ浦総合公園ビギナーズ探鳥会』（茨城県）

【日時】2015 年 12 月 13 日（日）９時～11 時
【天候】曇り時々小雨
【場所】霞ヶ浦総合公園
【参加人数】34 名
【リーダー】３名
【お試し入会】５名（非会員のうち２割）
【広報】
＜インターネット＞ 財団 HP、財団 Facebook、環境らしんばん
＜メール＞ 一斉メール送信（10/20、21 に全国の 29,269 名に送信）
＜チラシ＞ 探鳥会のご案内（9/20 から全国 35,000 名に送付）
＜新聞＞ 朝日新聞茨城マリオン、週刊読売タウンニュース、常陽リビング

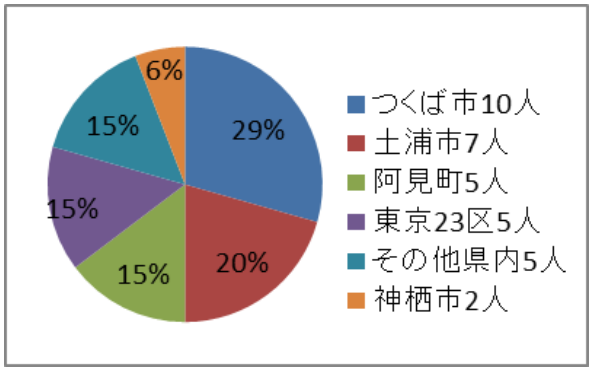
【性別】



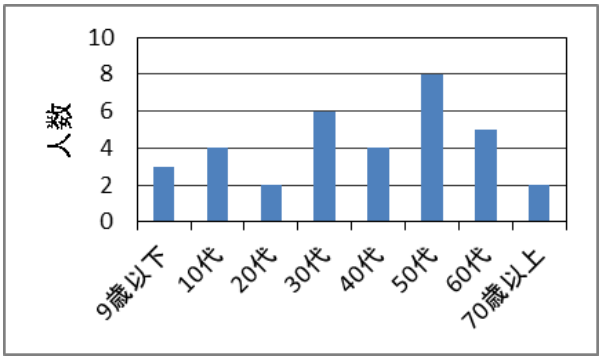
【バードウォッチングの経験回数】



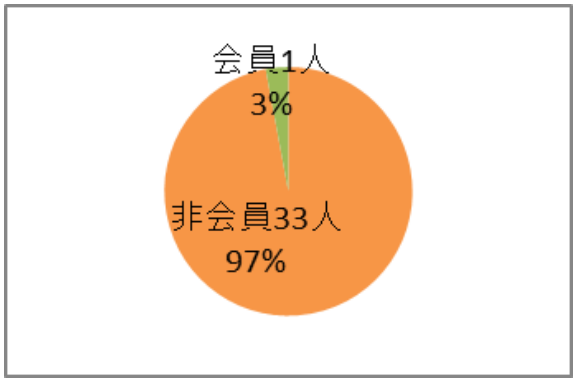
【お住まい】



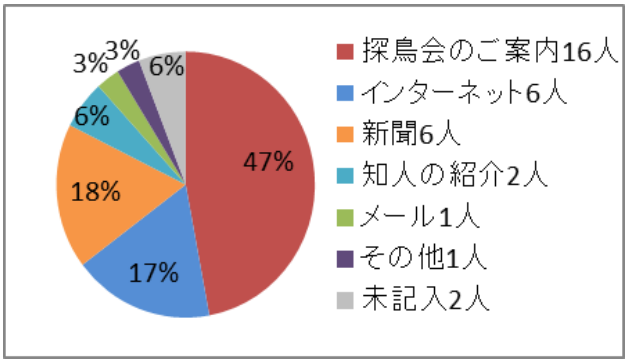
【年齢構成】



【会員／非会員】



【何で知ったか】



■探鳥会概要

霞ヶ浦総合公園は、霞ヶ浦に面した広大な公園です。自然観察施設、スポーツ施設、国民宿舎、レストハウスなどが整備され、土浦市の観光名所となっています。

当日は、幼児から 70 歳代まで、幅広い年齢層の方々の参加がありました。また、約７割の方がバードウォッチング初心者でした。

集合地の駐車場からまばらな林のある広場に移動、スタッフが双眼鏡の使い方をじっくり説明した後、参加者は近くの木の葉にピントを合わせ、しっかりのぞく練習をしてから観察が始まりました。林、田んぼ、草地、水辺など、多様な環境での野鳥観察を楽しみました。

■探鳥会の様子

当日は雨の心配がありましたが、車のトランクの扉を上に開き、屋根替わりとしたことで、受付が濡れないようにしっかり工夫がされていました。

参加者数に対してリーダー３名と少ない印象でしたが、リーダーそれぞれが参加者の皆さんに話しかけたり、望遠鏡をのぞくよう声をかけたり、常に心配りをされていました。幼児の対応をされていたリーダーの方は、子ども目線になるようしゃがんでお話をしたり、ユーモアを交えて鳥の解説をするなど、話す対象に合わせた工夫をされていました。

▲霞ヶ浦の水鳥を観察

観察した鳥は、オオハクチョウ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、キジバト、カワウ、コサギ、オオバン、ユリカモメ、セグロカモメ、ミサゴ、オオタカ、カワセミ、コゲラ、チョウゲンボウ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ムクドリ、アカハラ、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、コブハクチョウの 33 種類でした。鳥合わせでは、コブハクチョウが霞ヶ浦にはもともと生息していなかったことを伝え、在来種と外来種についての補足説明をされていました。

▲参加者にのぞくよう声をかけるリーダー

■参加者の声

5 歳の男の子：お父さんと参加しました。双眼鏡で鳥を見ることは難しかったけど、最後は見えるようになりました。いろいろな鳥を見ることができて楽しかったです。

20 代の女性：昨年、同じ探鳥会に友人とふたりで何となく参加したのですが、それをきっかけに、バードウォッチングに夢中になりました。今日は自分ひとりだけではなかなか見つけられない鳥にも出会えて大満足です。

50 代の女性：普段から鳥の種類を覚えたいと思っていますが、なかなか覚えられません。今回の探鳥会で身近な野鳥を少しだけ覚えることができました。野鳥の声にもとても興味があるので、後で野鳥の声の CD を購入してみようと思っています。

■まとめ

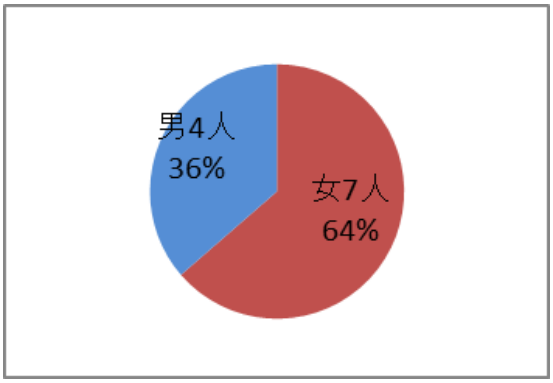
リーダー数が参加者数に対して少ない探鳥会でしたが、リーダーの細やかな配慮により、始終、温かい雰囲気の探鳥会という印象を受けました。バードウォッチング初心者の方が、安心して楽しく参加するためには、雰囲気づくりがとても大切であることを改めて実感させられる探鳥会でした。

（普及室／柴田英美）

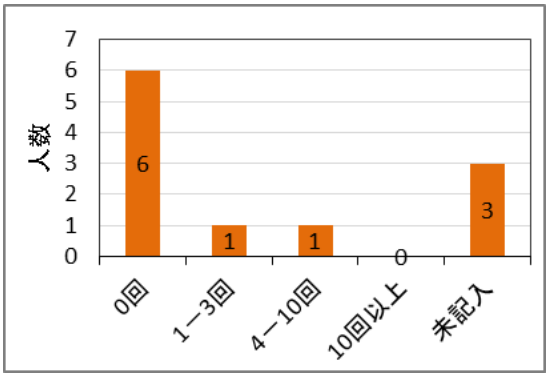
『初めての親子バードウォッチング in 鴨川デルタ』（京都支部）

【日時】2015 年 12 月 23 日（水・祝）11 時～14 時（随時受付、解散）
【天候】曇り
【場所】鴨川デルタ
【参加人数】11 名
【リーダー】10 名
【お試し入会】0 名
【広報】
＜インターネット＞ 財団 HP、財団 Facebook、環境らしんばん
＜メール＞ 一斉メール送信（10/20、21 に全国の 29,269 名に送信）
＜チラシ＞ 探鳥会のご案内（9/20 から全国 35,000 名に送付）
＜支部報＞ そんぐぽすと
＜新聞＞ 朝日新聞（12/17）、京都新聞（12/21）

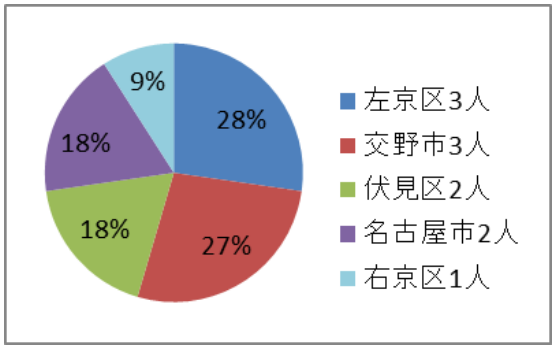
【性別】



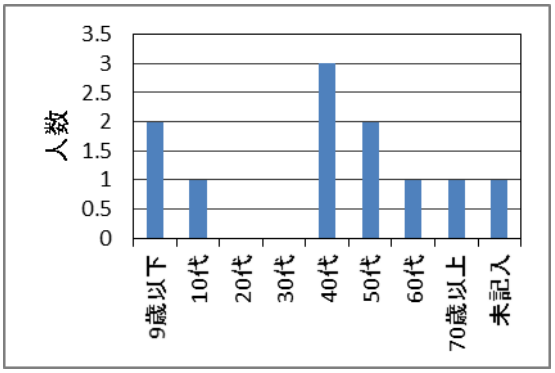
【バードウォッチングの経験回数】



【お住まい】

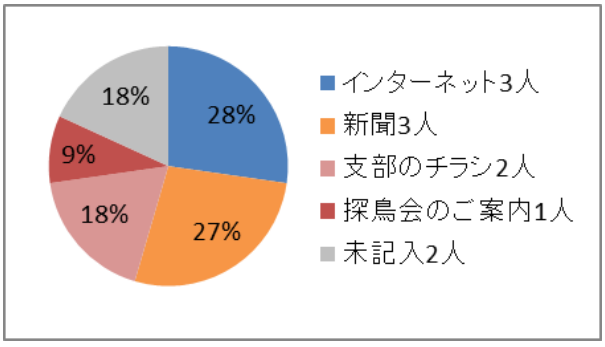


【年齢構成】



【会員／非会員】

【何で知ったか】



■探鳥会概要

鴨川デルタは、京都・出町柳にある賀茂川と高野川の合流地点です。緑地公園や川を渡るための飛び石があり、市民の憩いの場や観光スポットとして賑わっています。

この探鳥会は親子向け探鳥会として企画され、参加者が川沿いに設けた４ヶ所の定点を移動し、それぞれの場所で解説を受けるスタイルで実施されました。11 時～13 時の受付時間に 11 名（４組）が訪れ、それぞれ１時間弱のバードウォッチングを楽しみました。

■探鳥会の様子

やや冷え込み、雨が降り出しそうなお天気の中での開催となりました。当日お手伝いに来てくださった方も含め 10 人のリーダーが集まりました。開始前に、普段から親子向け探鳥会を運営している主担当のリーダーから、

「子どもにスコープを覗いてもらうときは片目を手で隠してあげると見やすいようです。」

「子どもはぶつかって動かしてしまうことがあるので、三脚とスコープを押さえておくのがおすすめです。」

といった案内がありました。

受付と４ヶ所の定点に２人ずつリーダーが入り、それぞれの定点では、大人用と子ども用として、高さの違う２つのスコープを用意していました。また受付では

「プレゼントがあるので、終わったら受付に戻ってきてください。」

と伝え、最後にミニミニ野鳥図鑑を渡して支部の紹介などができるようにしていました。

この日定点では、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、カワウ、アオサギ、コサギ、ダイサギ、ユリカモメ、セグロセキレイ、カワセミなどの水鳥やハイタカ、トビなど約 20 種類が観察できました。参加者が重ならなかったため、１つの定点で、１組の参加者を案内していました。そのため、リーダーが参加者の属性を尋ねたり、子どもの背の高さに合わせてスコープを調整したりと、相手に合わせた細やかな対応がされていました。参加者からは日頃思っている野鳥に関する質問もあがっていました。

▲最後の定点で観察中

■参加者の声

50 代の男性（小２の女の子のお父さん）：大阪から参加しました。庭に来たヒヨドリにエサをあげたことがきっかけで、娘が野鳥に興味を持ちだしました。野鳥に関連するイベントに連れて行くようにしています。

40 代の女性（２人のお子さんのお母さん）：私が野鳥を好きで、子どもたちにも自然好きになってもらいたいと思い、連れてきました。よく自然番組を見せています。

■まとめ

終了後に支部の事務所で反省会があり、「市報に載せるなど広報の工夫をしたい」「来年もやりましょう」「対象を絞らず、『お子さん連れの方も参加いただけます』くらいにした方が多く参加してもらえたかもしれない」など、次回に向けて熱心な意見があがっていました。

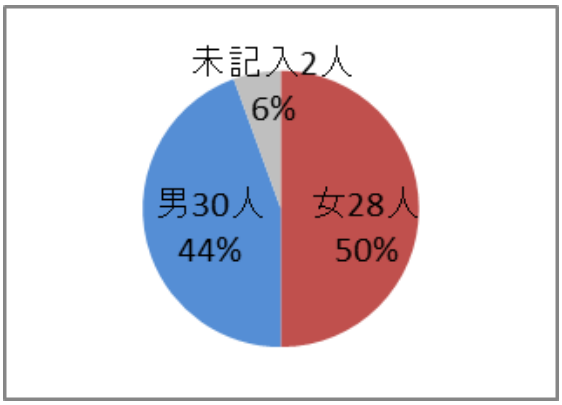
今回は、「全員で同じコースを移動する一般的な探鳥会では、子どもの興味を持続することが難しい」との考えから、出入り自由で滞在時間も参加者が決められるスタイルにしたそうです。実際３ヵ所目で、子どもが飽きてきた親子は、小雨が降り出したこともあり、４ヶ所目には行かずに受付に戻られていました。また当日は、観光客の参加もあり、いつでも参加できるスタイルである今回のやり方の利点を感じました。

（普及室／堀本理華）

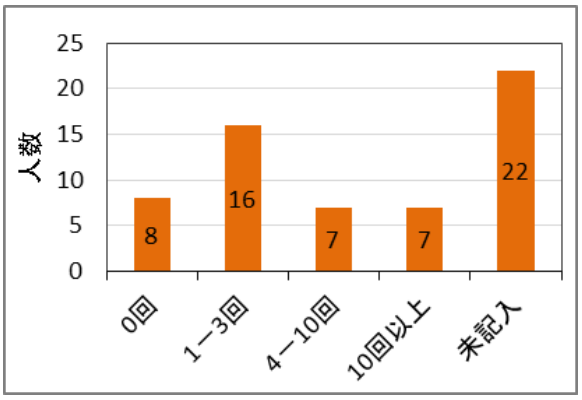
『真岡・井頭公園ビギナー探鳥会』（栃木）

【日時】2015 年 12 月 27 日（日）９時～12 時
【天候】快晴
【場所】井頭公園
【参加人数】60 名
【リーダー】13 名
【お試し入会】４名（非会員のうち１割弱）
【広報】
＜インターネット＞ 財団 HP、財団 Facebook、環境らしんばん、支部 HP
＜メール＞ 一斉メール送信（10/20、21 に全国の 29,269 名に送信）
＜チラシ＞ 探鳥会のご案内（9/20 から全国 35,000 名に送付）
＜新聞＞下野新聞、下野新聞折り込みチラシ

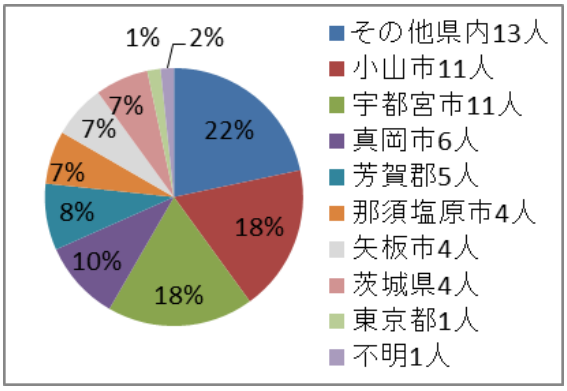
【性別】



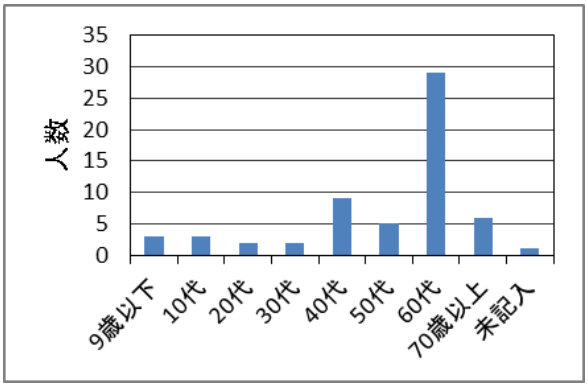
【バードウォッチングの経験回数】



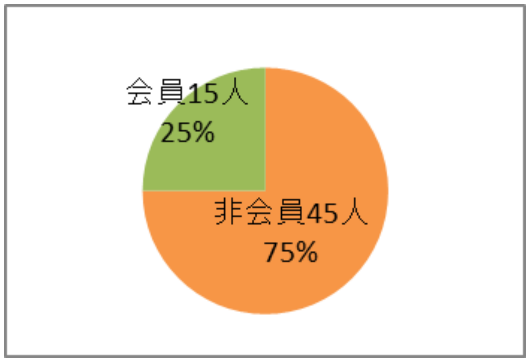
【お住まい】



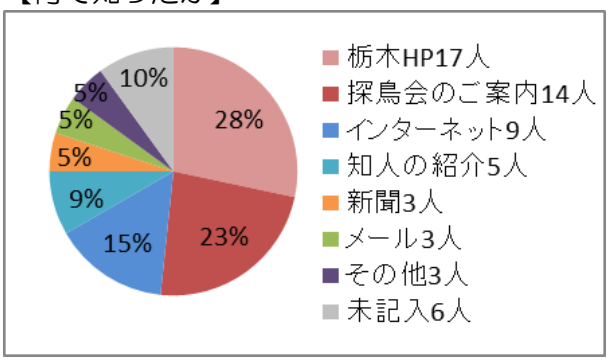
【年齢構成】



【会員／非会員】



【何で知ったか】



栃木では今年度「ビギナー向けの探鳥会」を合計 6 回開催しています。今回はその 3 回目として、井頭公園（いがしらこうえん）を会場に開催されました。

井頭公園は、栃木のホームグランドといってもよいフィールドです。人口の多い宇都宮が近く、支部の事務所からも便利な場所にあります。

さらに公園の中には、鳥見亭（とりみてい）という観察舎があり、ここでは毎年カモのシーズンになると栃木のメンバーが交代で観察指導にあたっています。鳥見亭は県からの委託を受けて栃木が管理運営を行っている施設で、栃木にとっては多くの来園者と接する出会いの場となっています。

これまでも鳥見亭にふらっと立ち寄ったことがきっかけに探鳥会に参加した人や、支部に入会された方がたくさんいます。

■探鳥会は受付から始まっている

～告知媒体はインターネットが主流～

さて、この日は集合時間の少し前から駐車場に参加者が集まり始め、合計 60 名が参加されました。そのうちの 3/4 が、新聞やホームページ、支部や財団からのダイレクトメールを受け取った非会員の方々、残りの 1/4 は支部の会員の方々です。

会員を増やすための探鳥会全体に言えることですが、非会員の告知媒体はホームページの割合が増えています。新聞を見た人よりもホームページや一斉メール送信、フェイスブックなどのインターネットを通じての告知の方が上回る傾向が続いています。

非会員を集客するのなら、まずはホームページを作ること。その上でブログ、フェイスブックを用意することが不可欠となってきていることがわかります。

～参加者名簿にも一工夫～

参加者の受付名簿は、従来財団からの書式を使っていましたが、今回は支部で独自に考案したカード型の受付記入用紙を使用しました。その趣旨は、住所と電話番号、メールアドレスを丁寧に記入していただき、今度の連絡を取りやすくしようというところにあります。回収された名簿は、支部と財団で共有し、支部の中でも独自にデータベースを作り、年に 1 回程度探鳥会の予定などのダイレクトメールを送り、関係が切れないようにアフターフォローに努めるとのことです。

～モナーク 7 の無料貸し出し～

財団からも 2 名の職員が参加し、支部と財団のテーブルを並べて、探鳥会の受付、図鑑やカレンダーの販売、双眼鏡の無料貸し出しを行いました。

双眼鏡は株式会社ニコンさんからお借りしたモナーク 7 28 台を車に積んで持参しましたが、すべて出払うほどの人気でした。バードウォッチングは、対象物との距離が離れているため、光学機器の性能の差が感動の差として表れやすい面があります。そこで、ニコンさんにお願いして、これからバードウォッチングを始めてみたい人に良質の双眼鏡を無料で貸し出しできるサービスを用意した次第です。

▲双眼鏡貸し出しとグッズ販売

■探鳥会の様子

～双眼鏡の説明～

探鳥会の冒頭には、スタッフ紹介の後、双眼鏡の使い方についていつもより丁寧に説明していただきました。せっかく性能の良い双眼鏡を手にしても、自分の目に合わせて調節したり、見たいものを双眼鏡の視野に入れるコツをつかまないと宝の持ち腐れです。この説明を丁寧に行うことで、3 時間の探鳥会の終わりごろには参加者も自分で鳥を探せるようになっています。

～つかみはカモの観察から～

双眼鏡の説明の後、池のほとりに向かい、まずは初心者でも観察しやすい水鳥の観察です。

ヒドリガモ、オナガガモ、カルガモ、マガモなどたくさんのカモが池のほとりでたたずんでいるのをみるや、すぐに数人のリーダーの方々が散開して望遠鏡を設置し、参加者に声をかけます。

望遠鏡を通してカモをまじかに見ると、まるで息遣いまでもが聞こえてくるような迫力。参加者は驚きの声をあげます。そこですかさず、

リーダーは図鑑を見せながら、カモについての識別や体の特徴、生活など基本的な説明を行うと、参加者は今まで知らなかった世界にどんどん引き込まれていきます。こうなればしめたもの。バードウォッチングのつかみは ok です。

～松林で小鳥の観察～

水鳥の観察でバードウォッチングの醍醐味を味わった参加者を引率して、今度は松林の方へ移動です。

ここは道が狭いうえに、公園のレンタサイクルに乗った来園者と頻繁に出会うので、リーダーとしては気をもむところです。10m先の林の小鳥に注意が向ける一方で、別方向から近づいてくる自転車に注意して、「道を開けてください」と声をかけなければならないのでなかなか大変です。人が来やすい人気の公園をフィールドに探鳥会を開催することは非会員が参加しやすくなって良いことなのですが、必然的に他の利用者との接触が増えてきますので、コース取りやスタッフの声掛けなどご苦労が増えます。

その気苦労もあって松林では、ヤマガラ、エナガ、シジュウカラ、メジロの混郡と出会うことができました。林の中で羽音が聞こえてくるくらい近い距離でたくさんの小鳥と出会い、参加者たちはなんとも神秘的な時間に息をするのも忘れているようでした。

～双眼鏡を使って自分で探す～

探鳥会も後半に差し掛かってくると、参加者も少しづつ双眼鏡を使って観察することにも慣れ、自分で見たいものを観察することができるようになってきました。ちょうどそんな頃合いに、松林の中でビンズイを観察したり、水路のわきでカワセミを観察したりすることができました。そのころにはほとんどの方が自分の双眼鏡で観察を楽しめるようになっていました。自分で見たいものを見る、自分で見つけて観察することができるようになると自宅に戻ってからも自然と鳥に目が行くようになるし、探鳥会にもまた参加してみようという気持ちにもなりますね。

～鳥合わせの一コマ～

鳥合わせでは、お母さんと参加していた５歳くらいの女の子がリーダーの声に耳を傾け、一生懸命記録をつけていたのが印象的でした。

■「何かやれば必ず返ってくる」

探鳥会終了後、担当の手塚さんと食事をしながら探鳥会の振り返りを行い、よいところや改善した方がよいところが様々に出てきました。

しかし、特に印象的だった言葉は、「何かやれば必ず返ってくる」という言葉です。

栃木ではここ数年間会員が減っていません。その入会者の入り口を改めて調べたところ、半分がホームページでのご入会、半分はビギナーズ探鳥会でのご入会だったそうです。

それまで会員に偏りがちだった探鳥会の場を、会員ではない方に向けて告知して、その方々が居心地よく参加してくれるように努力してこられました。そのために、リーダー研修会を開催し、埼玉の事例に倣ってリーダーの手引きも発行してきました。それらの取り組みが徐々に数字となって表れてきている、そういった実感がこの言葉となって出てきたのだと思います。

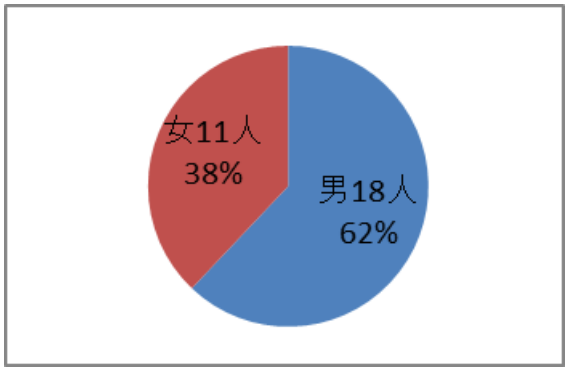
（普及室／箱田敦只）

▲松林での探鳥会

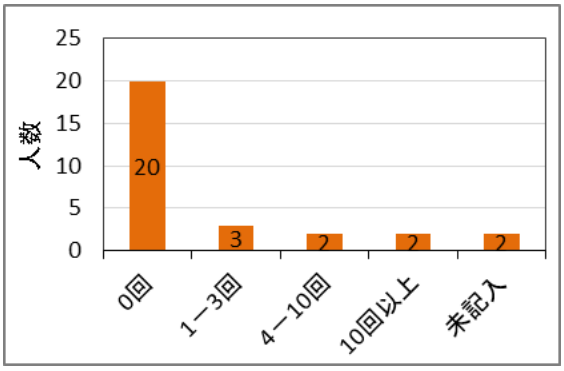
『和歌山城公園・ビギナーズ探鳥会』（和歌山県支部）

【日時】2016 年 1 月 17 日（日）9 時～12 時
【天候】曇り
【場所】和歌山城公園
【参加人数】29 名
【リーダー】10 名
【お試し入会】3 名（非会員のうち 1 割）
【広報】
＜インターネット＞ 財団 HP、財団 Facebook、環境らしんばん
＜メール＞ 一斉メール送信（1/12 に近畿+三重の 5,104 名に送信）
＜チラシ＞ 探鳥会のご案内（11/20 から全国 27,000 名に送付）
＜新聞ほか＞ ニュース和歌山（1/13 頃）、有田市・海南市地域ミニコミ紙「ありかい」

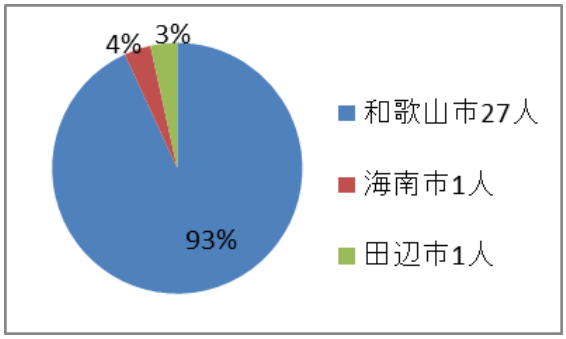
【性別】



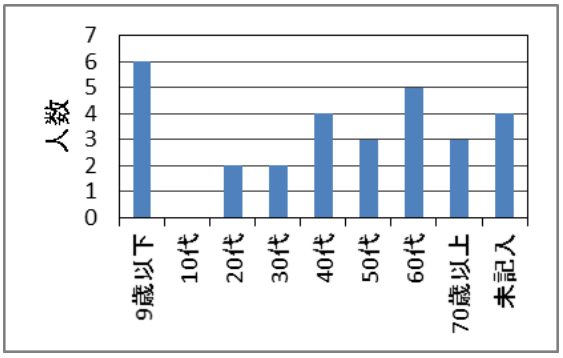
【バードウォッチングの経験回数】



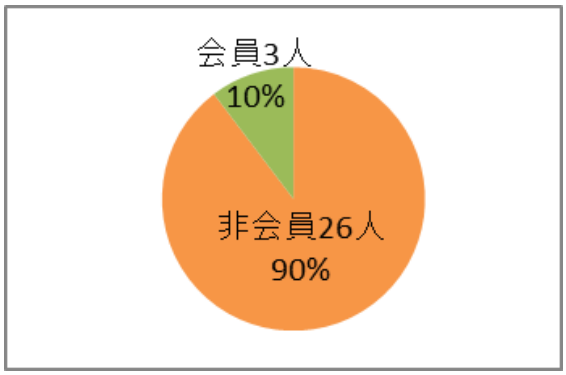
【お住まい】



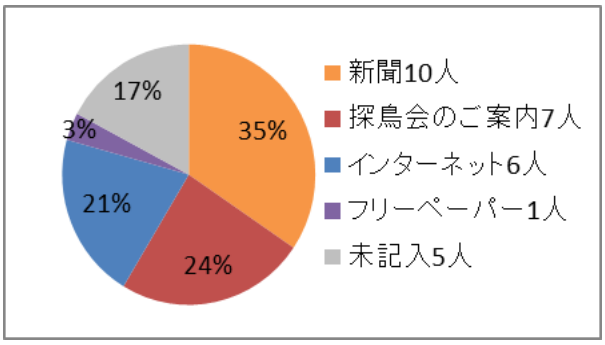
【年齢構成】



【会員／非会員】



【何で知ったか】



■探鳥会概要

12 月から引き続き、和歌山城公園で２回目の開催です。

和歌山城を中心に茶室や庭園、歴史館や動物園などがある和歌山城公園の周辺は、官公庁や大きな企業社屋、ホテルなどが建ち並ぶ和歌山市の中心地です。都市部にあって公園内の緑は貴重で、多くの市民が訪れています。

探鳥会参加者は 29 名。和歌山城公園を中心に、近隣の公園にも足を延ばすコースを２時間半かけてまわり、じっくりとお濠の水鳥や林の中の小鳥を観察しました。

■探鳥会の様子

当日は穏やかに晴れ、初心者でも外で活動しやすい、格好の探鳥会日和でした。

望遠鏡と緑色のフラッグで目印した集合場所に次々と集まってくる参加者を、受付のリーダーたちが明るくリラックスした雰囲気で出迎えます。

挨拶とコース説明のあと、まず初めに全体で双眼鏡の使い方を説明されました。少し離れた所に設置したスコープの上には可愛らしい小鳥の模型が置かれ、皆で対象を双眼鏡の視野にとらえる練習をします。初めて双眼鏡を使った参加者からも

「見えた！」

「とてもはっきり見える！」

と嬉しそうな声が上がります。双眼鏡の使い方に少し自信が持てた参加者から、野鳥との出会いへの期待の高まりが伝わってきます。

お堀のマガモやオシドリでウォーミングアップの後は、少し離れた樹上のツグミやイカル、ジョウビタキを観察します。リーダーが A4 サイズの鳥の写真シートを示しながら解説してくれるので、見逃してしまったり細かく観察できなかった参加者も、その鳥をイメージしやすくなった様です。

スコープでの観察を参加者に勧める時に、一番見やすい場所に子供用に低く設定したスコープを設置する優しい配慮が印象的でした。

イカルの群れの水浴びが観察できるポイントでは、イカルの特徴や行動の様子を解説しながら水浴びが始まるのを 15 分ほど待ちました。大人数に警戒してか、残念ながら水浴びは見られませんでしたが、野鳥と人間の距離の在り方を考える良い機会になったようです。

探鳥会の締めくくりはビルの外壁にとまって地上を見下ろすハヤブサの観察です。都市部で逞しく生きるハヤブサをスコープでしっかり捉えてどの参加者も大満足の様子でした。

▲ビル外壁にとまるハヤブサを観察

■参加者の声

幼稚園年長組の男の子とお母さん：子供がハヤブサに憧れて、鳥の事を知りたいからと言って参加しました。まさか本当にハヤブサが見られるなんて！大興奮です。

60 代男性：新聞のイベント案内を見て興味があったので参加しました。この公園は散歩でよく来ますが、詳しい人に教えてもらうと今まで気づかなかっただけでたくさん鳥がいることに驚いています。

■まとめ

２回目の「会員を増やすための探鳥会」となった今回の探鳥会では、１回目の実施を踏まえて、経験の浅い参加者によりわかりやすいよう、リーダーの役割分担やプログラムの進行、小道具の利用など随所に工夫を加えられていました。

「アニメ『魔女の宅急便』に出てくるカラスは『コクマルガラス』っていう種類です。」「今夜のテレビ番組では『アオバト』が取り上げられるんですよ。」と、家に帰っても野鳥への興味を持ち続けられるような話題の提供も巧みでした。

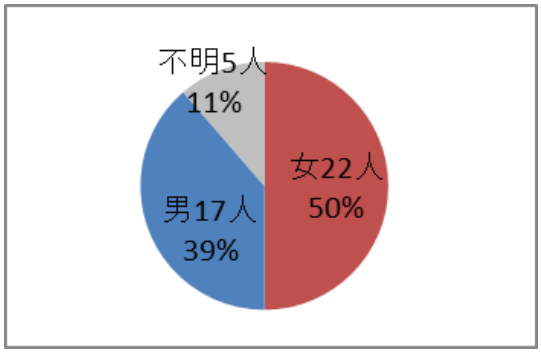
参加者に寄り添うきめ細かな探鳥会の組み立てが、お試し入会につながったのだと感じました。

（普及室／浅野綾子）

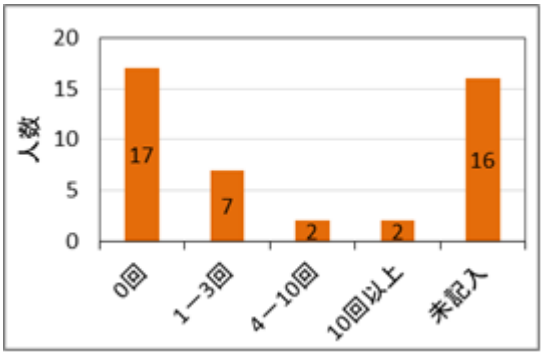
『西那須野・那須野が原ビギナー探鳥会』（栃木）

【日時】2016 年 1 月 23 日（日）9 時～12 時
【天候】うす曇り
【場所】那須野が原公園
【参加人数】44 名
【リーダー】11 名
【お試し入会】4 名（非会員のうち 1 割）
【広報】
＜インターネット＞ 財団 HP、財団 Facebook、環境らしんばん、支部 HP
＜メール＞ 一斉メール送信
（1/13 に関東+福島、新潟、静岡、長野、静岡の 16,578 名に送信）
＜チラシ＞ 探鳥会のご案内（11/20 から全国 27,000 名に送付）
＜新聞＞ 下野新聞（1/20）、栃木よみうり

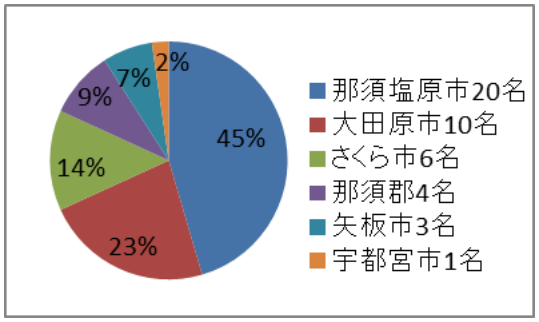
【性別】



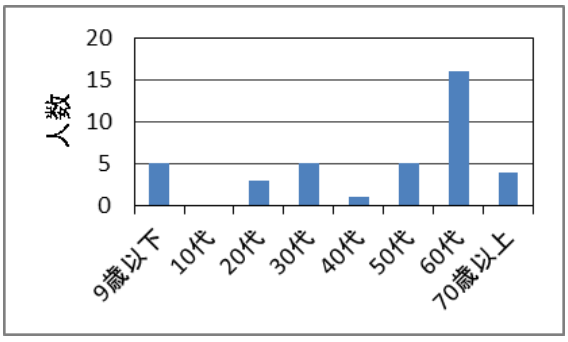
【バードウォッチングの経験回数】



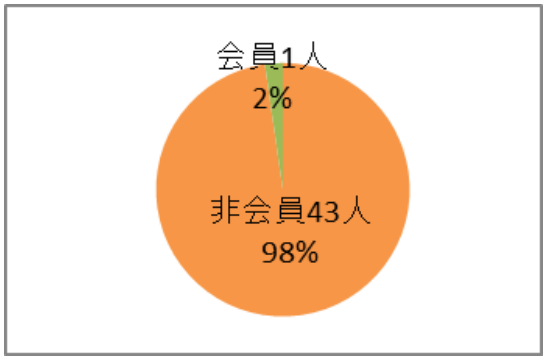
【お住まい】



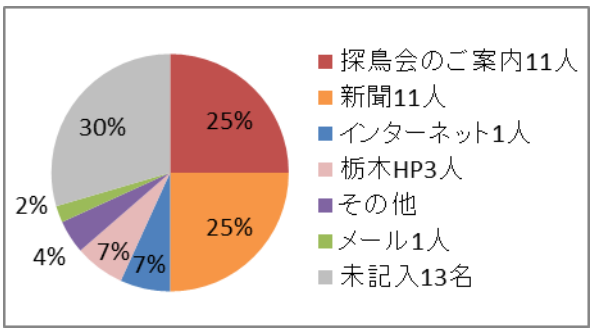
【年齢構成】



【会員／非会員】



【何で知ったか】



■探鳥会の概要

那須野が原公園は栃木県の北部、那須連山に連なる広大な那須野が原の一画に位置する緑豊かな公園です

この日の探鳥会は気温は低いものの、薄日の差すお天気の中で行われました。参加者は 44 名。60 代を中心に家族連れを含む幅広い年齢層となっていました。

コースは広い公園内の西側の一角で、木立の中で林の鳥を、調整池で水鳥の観察をしました。

■探鳥会の様子

スタッフは８時に集合。８時半の受付開始までに販売物などの準備をして参加者を待ちます。やってきた参加者に順次受付をしてもらい、双眼鏡の貸出と販売物のご案内をしました。参加者のうち約半数が双眼鏡を希望されました。

９時過ぎ、リーダーからコースの概要や双眼鏡の使い方の説明が始まり、

「双眼鏡を使ってみて、もし欲しくなったら、今日は販売もしていますよ。」

と終了後の販売の案内もありました。

一通り説明がすむと、11 名のリーダーが参加者の間に入り、入り口近くの広場へと移動。そこでシメやハクセキレイそしてスズメを観察しながら双眼鏡に慣れる練習をしました。

当日配布された日本野鳥の会栃木の鳥合わせリストには「ものさし鳥」の図があり、スズメの観察時には

「スズメの大きさを覚えておくといいですよ。何かの鳥を見つけた時、スズメより大きいか小さいかなどの目安になります。他に、カラスやハトもものさし鳥と言う大きさの基準になる鳥です」

と説明がありました。参加者はスズメをじっくりと見ることで、

「寒いからかな？これが『ふくらすずめ』ってこと？」

などと、新しい発見があったようでした。

途中、シロハラを見た参加者の中から

「鳥が地面でエサを探すんですか？」

と質問があり、その疑問にリーダーの一人が地面の枯れ葉ひっくり返しながら

「こうやって枯れ葉をひっくり返すとその中に虫が隠れているんです。それを食べているんですよ。」

と実演してみせる場面もありました。

中には、自分で双眼鏡を持ってきたものの、貸出用の双眼鏡を利用した参加者もおり、

「やっぱり双眼鏡が違うとよく見えますね！」

といつも以上に鳥がよく見えることを楽しんでいる様子も見られました。

最後に水鳥の多くいる調整池のそばでカモ類、カイツブリなどを観察し、集合場所の駐車場へ戻り、鳥合わせとなりました。

全部で鳥は 27 種類でした。

■参加者の声

20 代女性：初めての参加です。公園などで見る鳥が気になり、探鳥会へ参加すればもっと多くの鳥が見られて、名前も覚えられるかと思い参加しました。

60 代ご夫婦：庭に来る鳥を見ているうちに興味が湧いてきました。

30 代女性２人組：鳥を飼っているので元々鳥が好きです。野生の鳥が見てみたくて参加しました。

▲シメを観察中

■まとめ

寒い日だったので、３時間の探鳥会はやや寒さが身に染みたようでした。しかし、モナーク７クラスの双眼鏡を貸出たことや望遠鏡も多く用意されていたため、初心者の方でも鳥をよく見る事ができ、楽しんでいらしたように感じました。

最後の鳥合わせでは、イラストを使っての振り返りがあるため、どんな鳥を見たのかをしっかり印象に残す効果があると思います。

栃木県でのビギナー探鳥会は全部で ６ 回ありますが、それぞれ開催場所の近くに住む人が参加していることから、来年はもう少し開催場所を増やしていきたいという意見がありました。

（普及室／植木陽子）

「探鳥会で会員拡大と人材確保」

京都支部では2000年に1,461名の会員が在籍していましたが、2015年には751名とほぼ半減しました。そのため財政も悪化し、一般会計では 2007 年からの 5 年間に累積で305 万円、年平均で 61 万円の赤字になりました。

今までと同じことをやっていたら会員は減る一方、会を運営する幹事やスタッフ（活動のサポーター）も高齢化する一方。財政的にもいつかは破綻するという状況の中で、失敗してもいいから新しいことにチャレンジすべきだと、2 年前から支部改革に取り組んできました。

■会員拡大のための取り組み

一番重要な目標は支部会員の拡大で、特に若い世代の会員を中心に、750 名から 1,000 名に増やす活動に取り組んでいます。

会員を増やす具体的な取り組みの一つとして、一般の方を対象とした初心者向けの野鳥講座を開設しています。これによって、22 名の修了者のうち 8 名が入会され、その内の 1 名にはスタッフになっていただきました。

また、他支部の方法を採り入れてお試し会員制度も始めました。千円で半年間会員になっていただき本会員に誘導するという制度で、これまで 43 名が登録され、内 11 名が本入会されました。

さらに、当支部が 1936 年に全国初の支部として結成され、本年 80 周年を迎えたことを記念して、一般 1,000 円 OFF、学生 2,000 円 OFF の会費割引キャンペーンをスタートさせ、会員拡大を図っています。

■ウィングの広い探鳥会で定着率アップ

会員を増やす一方、退会者を減らす努力も必要です。その一環として、会員の定着率を高めるために、探鳥会のリフレッシュにも取り組んでいます。まず、アンケートを実施したところ「植物など自然観察を兼ねた探鳥会」への要望が多かったことから、鳥だけでなく自然をより広く楽しめるようウィングの広い探鳥会を企画することとしました。

また、よりタイムリーな探鳥会が企画できるよう、従来年 2 回だった例会企画部会を 2 カ月ごとに開催するようにしました。部会の参加者は最初は 3 名だけでしたが、毎回新しい参加者が増え、前回の 3 回目は 6 名に増えました。

こうした各種の取り組みの結果、新しいタイプの探鳥会が開催されるようになってきています。昨年からはガールズ探鳥会や親子探鳥会、ヤング探鳥会が、今年からは京都西山に自生するフクジュソウを観察する西山ハイク探鳥会をはじめ野草や昆虫など幅広く自然観察を楽しむ探鳥会が開催されるようになりました。さらに、3 月の「冬のコウノトリ郷公園と天空の竹田城跡日帰りバスツアー」をはじめ年 2～3 回のバスツアーを計画中です。

▲宝ヶ池平日探鳥会（10 月 29 日開催）

■平日探鳥会で人材をリクルート

京都支部ではこれまで毎月 1 回第 3 木曜日に北嵯峨平日探鳥会を実施してきました。平日の方が参加しやすい会員のために設けた探鳥会です。近年「平日の人出が少ない時に他の探鳥地でも平日探鳥会を開催してほしい」という声が高まったことから、交通の便が良い探鳥地を 3 カ所選び、毎週どこかで平日探鳥会が開催できるよう、第 1 週は下鴨神社、第 2 週は宇治、第 3 週は北嵯峨、第 4 週は宝ヶ池で平日探鳥会を開催しています。

毎週平日に開催すると参加者が少なくなるのではないかという予想に反して、昨年 10 月から始めて 4 カ月経過した現在、平均約 20 名が参加されています。

この平日探鳥会にはもう一つ別の目的があります。退職されて時間に余裕のある方に参加していただき、交流を深めながら支部の活動を

手伝っていただくスタッフとしてリクルートしようと考えていました。

京都支部では探鳥会を担当するメンバーが少ないために一部の人に偏り、負担が大きくなっています。それをカバーする探鳥会リーダーを育成すると同時に、支部を活性化させるためにも日常の活動を担う人材を増やすことが必要不可欠です。

そのために、平日探鳥会で配布する資料に、「参加者名簿の記入や資料配布、参加費徴収など簡単な作業を手伝ってくださる方を募集」と書きました。

■「引き寄せの法則」で人材確保

嬉しいことに、最初の平日探鳥会で「何か手伝わせてください」と申し出てくださる会員がいらっしゃいました。また、４カ所の平日探鳥会すべてに参加される会員もおられ、そういう常連の中から毎月一人ずつ協力者が現れて現在４名に手伝っていただいています。来年度からはスタッフとして登録していただく予定です。いずれもこちらからではなく自主的に協力を申し出てくださいました。

これは一般的に知られている「引き寄せの法則」が働いたのかも知れません。「引き寄せの法則」とは、願うだけで人は何でも思う通りに引き寄せることができるというシンプルな法則です。しかし、多くの人は「そんなの無理」と思っています。法則とは数字の公式のようなもので、不変の決まりごとのようなものです。

今後もこちらから個人的に協力を依頼するのではなく、自然体で協力者が現れるのを待ちたいと思います。

（京都支部副支部長／西村克之）

◆探鳥会保険集計結果（2015 年 12 月分）

12 月は 65 支部からご報告をいただき、計 259 回の探鳥会が開催され、のべ 6,703 人が参加されました。

表 2. 12 月の探鳥会保険集計結果（2016 年 1 月 15 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	1	17	5	1	23
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	−	−	−	−	−
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	0	0	0	0	0
滝川支部	0	0	0	0	0
道北支部	0	0	0	0	0
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	3	94	40	9	143
小樽支部	2	6	8	2	16
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	1	15	4	3	22
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	1	10	9	4	23
青森県支部	−	−	−	−	−
弘前支部	2	13	1	2	16
秋田県支部	3	36	1	3	40
山形県支部	1	2	13	2	17
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	2	32	2	7	41
北上支部	0	0	0	0	0
宮城県支部	2	24	18	5	47
ふくしま	2	44	0	5	49
郡山支部	2	23	0	6	29
二本松	−	−	−	−	−
白河支部	0	0	0	0	0
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	1	20	1	1	22
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	11	120	89	16	225
栃木	−	−	−	−	−
群馬	7	78	54	27	159
吾妻	−	−	−	−	−
埼玉	11	323	95	80	498
千葉県	10	173	60	47	280
東京	15	577	11	81	669
奥多摩支部	16	232	184	70	486
神奈川支部	13	235	38	49	322
新潟県	−	−	−	−	−
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	2	45	9	2	56
石川	2	39	5	5	49
福井県	0	0	0	0	0
長野支部	1	31	6	2	39
軽井沢支部	1	9	8	1	18
諏訪	2	9	19	4	32
木曽支部	–	–	–	–	–
伊那谷支部	0	0	0	0	0
甲府支部	2	36	0	4	40
富士山麓支部	1	4	5	3	12
東富士	–	–	–	–	–
沼津支部	2	30	23	3	56
南富士支部	2	31	1	3	35
南伊豆	1	20	1	2	23
静岡支部	3	34	0	7	41
遠江	2	36	3	4	43
愛知県支部	15	180	138	42	360
岐阜	–	–	–	–	–
三重	3	36	22	5	63
奈良支部	3	68	35	6	109
和歌山県支部	1	3	7	4	14
滋賀	5	41	32	10	83
京都支部	9	136	60	30	226
大阪支部	26	514	101	115	730
ひょうご	10	128	92	25	245
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	33	11	3	47
島根県支部	2	22	1	2	25
岡山県支部	6	131	63	21	215
広島県支部	3	31	26	10	67
山口県支部	4	15	15	4	34
香川県支部	3	89	23	3	115
徳島県支部	5	72	13	5	90
高知支部	1	14	27	1	42
愛媛	4	55	23	10	88
北九州	5	57	3	5	65
福岡支部	7	124	33	16	173
筑豊支部	1	20	0	1	21
筑後支部	4	43	29	5	77
佐賀県支部	3	38	9	4	51
長崎県支部	–	–	–	–	–
熊本県支部	4	67	19	4	90
大分県支部	1	20	2	1	23
宮崎県支部	3	16	23	3	42
鹿児島	1	27	7	3	37
やんばる支部	–	–	–	–	–
石垣島支部	–	–	–	–	–
西表支部	–	–	–	–	–
全国	259	4,378	1,527	798	6,703

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

（普及室）

◆普及室からのお知らせ

■『フィールドガイド日本の野鳥』増補改訂新版の取り組み■

◇新版はカラスより軽い？

（公財）森林文化協会発行の雑誌『グリーン・パワー』で、新版を紹介してもらうことになりました。編集長に新版を送ったところ、「増補改訂版より 80 グラムも軽くなったのは何故？どうやって？」と質問され、よくぞ比べていただいたものと、嬉しくなりました。新版は増補改訂版より扱う種も解説も増えて 16 頁増となりましたが、用紙を工夫することで５ミリほど薄くして、約 450 グラムから約 370 グラムにまで落としました。野外で携帯しやすいように、厚くしない、重くしないためであることは言うまでもありません。

用紙の工夫について、新版の編集を担当した瀬古智貫（普及室 販売出版グループ チーフ）に改めて聞いてみたら、私も知らなかった工夫をしていたので一部を紹介すると・・・『フィールドガイド日本の野鳥』は、従来から、鉛筆で書き込みがしやすい点が評価されていたので、新版の用紙を検討する際にその機能が失われないような配慮もした、とのこと。また、バードウォッチャーは平地から高山まで移動することもあるので、周りの湿度変化も激しくなります。そこで束見本をいくつも作って鞄に入れ、富士山のふもとから５合目まで何回も往復して、紙のヨレ等もチェックしたそうです。

ちなみに、新版の約 370 グラムは、ハシボソガラスより少し軽いくらいでしょうか？野鳥の種ごとの体重は『野鳥便覧』（1941 年、大阪支部発行）に記載され、近年では愛媛県支部編『愛媛の野鳥 観察ハンドブック はばたき』（1992 年発行）が紹介しており、ハシボソガラスは 428～728 グラム、ハシブトガラスは 516～825 グラムと記されています。同種でもずいぶんと違いはあるものの、新版はハシボソガラスより軽くなり、２冊合わせてハシブトガラスほどの重さと言えるかも知れません。なお、『新・山野の鳥』は約 90 グラムでざっとムクドリ（68～98 グラム）程度、『見る読むわかる野鳥図鑑』約 170 グラムがキジバト（192～290 グラム）より軽い程度と言えるでしょう。

◇イカルはどこから？

１月に入って、イカルが東京の都心部に位置する公園などで見られているそうです。東京では郊外の鳥というイメージで、低地の緑地で見られる冬もありますが、都心部まで姿を見せることは珍しいように思います。この冬はイカルが低地に多いのかも・・・と思っていたら、標高千メートルを越えるハヶ岳倶楽部にもたくさんのイカルが飛来していると、柳生博会長から聞きました。１月 24 日にシンポジウム「鳥と風の通り道―渡り鳥の魅力とその保護」に登壇して新版の分布図を示しながら、漂鳥とされる鳥たちがどこからどこへ移動しているのかはよくわかっていないという話しをしたばかりだった私は、柳生会長に新版で漂鳥の定義を変えた（2014 年６月号などで書いたように、これまでの定義から「国内移動」を削除）ことを解説をしておきました。

１年を通して日本で見られるという点では留鳥と呼べるイカルですが、春夏だけ、秋冬だけの地域もあるので、漂鳥ともされます。分布図から秋冬のイカルを推測すると、北海道や東北のほか、大陸の繁殖地からも南下してくるものがいても不思議はありません。ただ、ウソやルリビタキのように広く繁殖しているのではなく、ロシアと中国のごく一部だけ。目録７版で英名に Japanese が付いて書き直した例として、シジュウカラ、メボソムシクイ、サンコウチョウ、クロツグミとともに、過去の連載（2015 年４月号）で紹介済みです。

ついでながら日本では少ないコイカルの分布図を見ると、朝鮮半島から大陸にかけて広く繁殖しています。これは、キビタキとマミジロキビタキ（日本では珍しいが、大陸での分布はキビタキより広い）に似ていると思いませんか？イカルに Japanese を付けるなら、繁殖地がほとんど日本だけのキビタキに Japanese を付けてもよいと思うのは私だけでしょうか？

◇オジロか？ニシオジロか？

新版では、目録７版で検討中とされているニシオジロビタキを解説したこと、日本鳥学会誌63巻１号（2014年発行）にニシオジロビタキの観察記録が掲載されたこともこの連載（2014 年 6 月号）で紹介してきましたが、当会ホームページの担当者から、相談がありました。ホームページ『BIRD FAN』の人気コーナー「フォトギャラリー」宛てにニシオジロビタキの投稿があったので、どう扱うべきでしょうか？と言うのです。

日本の野鳥は、目録７版掲載種から633種とされるようになってきた昨今ではありますが、そこにニシオジロビタキは含まれていません。が、ニシオジロビタキの写真を掲載する図鑑も増えてきたし、最近はオジロビタキと分けると、日本で冬を越すのはニシオジロビタキの方が多いとも言われるようになりました。一方、下嘴の色（オジロでは黒く、ニシオジロでは淡色が多いとされる）だけで２種を識別できるように思っている人もいるようで、誤認や混乱もあるようです。新版では、ニシオジロビタキの解説で上尾筒の色の違いにも触れておいたし、高野によるオジロビタキ雄のイラスト（P259）はニシオジロビタキ雄と区別するために、喉の赤味のある部分を減らすなどの微修正を施しました。類似種がいる場合は、それを否定できなくては同定できません。写真で同定するには、撮影条件や写り具合でいろいろに見える色味や、角度によっては見えない細部なども含めて、多角的に検討できるような複数のカットを要することが多いものです。

投稿者が複数の識別点を検討した上で、間違いなくニシオジロビタキを識別しているようであれば、目録７版では検討中であることを付記して掲載してよいのではないか・・・とその場では答えました。ただ、ホームページ上にオジロビタキとして投稿された過去の写真には、ニシオジロビタキと思われるものや、投稿写真だけでは 2 種のいずれかが同定できないものもあるようです。今後、それらを補足する文章も考えたいと思っています。

（普及室／安西英明）

▲今回は、新版で谷口高司さんに追加していただいた画像から、キバラガラ（上：雄夏羽、下：雌夏羽）です。長崎県支部報（2014年３月号）など雌雄の第１回冬羽の識別まで触れた記事もありますが、新版では種の識別を優先して、冬羽や若鳥の識別は解説文で補足しました。

◆今月の購読者数

探鳥会スタッフ通信２月号の電子メール版の購読者数は、先月から７名増えて809名です。支部ごとの購読者数は以下の通りです。

表３．探鳥会スタッフ通信２月号電子メール版の購読者数（2016年２月17日現在）

支部	購読者数	支部	購読者数
小清水	1	福井県	10
オホーツク支部	6	長野支部	2
根室支部	0	軽井沢支部	2
釧路支部	2	諏訪	4
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	70	木曽支部	1
旭川支部	4	伊那谷支部	1
滝川支部	1	甲府支部	3
道北支部	1	富士山麓支部	0
江別支部	0	東富士	0
札幌支部	4	沼津支部	3
小樽支部	3	南富士支部	2
苫小牧支部	2	南伊豆	2
室蘭支部	5	静岡支部	3
函館支部	0	遠江	6
道南桧山	2	愛知県支部	33
青森県支部	1	岐阜	5
弘前支部	4	三重	19
秋田県支部	3	奈良支部	3
山形県支部	5	和歌山県支部	5
宮古支部	1	滋賀	19
もりおか	3	京都支部	31
北上支部	2	大阪支部	25
宮城県支部	39	ひょうご	14
ふくしま	3	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	11
郡山支部	1	島根県支部	2
二本松	1	岡山県支部	23
白河支部	2	広島県支部	8
会津支部	2	山口県支部	4
奥会津連合	0	香川県支部	6
いわき支部	1	徳島県支部	6
福島県相双支部	0	高知支部	1
南相馬	0	愛媛	14
茨城県	21	北九州	12
栃木	45	福岡支部	11
群馬	25	筑豊支部	19
吾妻	1	筑後支部	6
埼玉	37	佐賀県支部	5
千葉県	18	長崎県支部	1
東京	53	熊本県支部	6
奥多摩支部	47	大分県支部	3
神奈川支部	20	宮崎県支部	3
新潟県	1	鹿児島	2
佐渡支部	1	やんばる支部	0
富山	3	石垣島支部	1
石川	29	西表支部	2
		合計	809

（普及室）

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）
ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。
配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

★編集後記

リーダーズフォーラムへご参加頂きました皆さま、お疲れ様でした。アンケートを拝読させて頂き、活気ある様子を垣間見ることができました。
只今支部の皆さまに向けて、バードウィーク全国一斉探鳥会の情報提出のお願いをしています。是非、情報をお寄せ頂ければと思います。宜しくお願い致します。
先日、家の前でアカハラ、シロハラ、トラツグミ、ツグミと４種類がお互い、かなり近い場所で餌探しをしている光景を見て、「アカ、シロ、キイロ」とちょっと楽しくなりました。暦の上では春ですが、まだ寒い日々が続いていますので、もう少しだけ冬の鳥を楽しみたいです。

（普及室／植木陽子）

≪お詫びと訂正≫
保険の集計で開催回数についての誤りがありました。
「スタッフ通信 12 月号（10 月分集計）」
滝川支部　０回　→　１回
全国　261 回　→　262 回

「スタッフ通信 1 月号（11 分月集計）」
旭川支部　０回　→　１回
札幌支部　０回　→　２回
全国　247 回　→　250 回

以上のようになります。各支部関係者の皆さまにはご迷惑おかけして申し訳ありませんでした。
また、ご指摘頂きましてありがとうございます。

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信　第 35 号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　2016 年 2 月 18 日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org